

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月11日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520302

研究課題名（和文） 近代フランスにおける文芸シャンソンの諸相と文学との交錯

研究課題名（英文） The interaction between chanson and literature from the second half of the 19<sup>th</sup> century to the beginning of the 20<sup>th</sup> century in France

## 研究代表者

吉田 正明（YOSHIDA MASAOKI）

信州大学・人文学部・教授

研究者番号：20191611

研究成果の概要（和文）：今回の調査研究を通じて、日本では入手困難な多くの一次資料（ベル・エポック期に活躍した歌手のオリジナル音源資料や楽譜付挿絵入り歌詞等含む）や文献を入手することができ、それらの資料に基づいて19世紀中葉から20世紀初頭にかけてパリの文芸キャバレーにおいて活躍したシャンソン作家の実態を探り、彼らが作った社会風刺的、政治的、文学的シャンソンの実相を明らかにすることができた。またこれまで日本においてはほとんど知られていなかったカフェ・コンセールの歌手たちの実態も明らかになった。

研究成果の概要（英文）：We can list the following three points as our major achievements. First of all, we could discover and collect various valuable literature and documents including records of original chansons and some text of songs with musical note and illustration of the “Belle Epoque” era. Secondly, through analyzing these sources, we could study the real aspect of several songwriters and authors of French literary songs who often went to artistic cabarets like “Chat Noir” of Montmartre to create and recite their works to the customers. Thirdly, we clarified some characteristics of their political and satirical works which have not been studied carefully until now. With all of the above achievements, we clarified the real aspect of peculiar performance on the stage of some famous singers of “Café-Concert” that is yet unknown to Japanese.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：フランス文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：フランス文学、シャンソン、  
文芸キャバレー、カフェ・コンクール

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 19世紀中葉から20世紀初頭にか

てのベル・エポック期に隆盛した文芸キャバレーやカフェ・コンセールの実相や文学との影響関係については、そのサブカルチャー的

側面ゆえフランスにおいてさえこれまであまり本格的な学術研究がされてこなかった。しかし21世紀になりフランス国立図書館などでそれまで分散していたシャンソン関連資料の調査と整理がようやく進み、シャンソン研究をする上での基盤と条件がようやく整い始めた。

(2) しかし日本においては、シャンソンの学術的研究はまだ立ち遅れており、本格的なシャンソン研究に着手することが急務であると思われた。

(3) これまで民衆的シャンソンが近代フランス詩に与えた影響を研究してきた本研究代表者と、シャンソンの文化的背景を精緻に分析してきた分担者が共同で、いまだ未開拓のこの領域を詳細に調査研究することで、近代フランス文学のあらたな側面と水脈を探り当てることができるのではないかと大いに期待された。

## 2. 研究の目的

(1) 主に19世紀中葉から20世紀初頭にかけてパリの文芸キャバレーやカフェ・コンセールにおいて活躍したシャンソン作家の実態を、現地で調査収集した文献や一次資料を手がかりに明らかにし、彼らが行った社会風刺的、政治的、文学的シャンソンの分析を通してシャンソンと文学との緊密な関係を跡付けるとともに、シャンソン作家と文学者、あるいは歌手たちとの交流・交友関係を明らかにする。

(2) ベル・エポック期に大衆的娯楽の花形となったカフェ・コンセールの実態を調査研究するとともに、そこで活躍したスター歌手たちを調査し、日本ではまだあまり知られていない彼らの実態と人気の秘密に迫り、レコードが普及する以前の舞台上での彼ら独特のパフォーマンスと歌芸の在りようを明らかにする。

(3) 本研究を通じて、まだ本格的な研究が進んでいない日本において、学術的なシャンソン研究を推進していく。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は2名の研究者の共同研究により3年間に渡って実施されたものである。フランス国立図書館やモンマルトル博物館、あるいはカルナヴァレ歴史館等での収蔵資料調査をはじめ、パリにおいて文芸キャバレー跡地の実地調査とシャンソン関連資料の発掘と収集を行い、ベル・エポック期に活躍した歌手たちの音源や映像や楽譜付歌詞等の多くの貴重な一次資料や文献を入手し、それ

らの分析を通じて当時のシャンソンやシャンソン作家や歌手たちの独特の舞台芸の実相を明らかにした。

(2) 研究代表者と分担者は、シャンソンを学術的に研究することを目的に「シャンソン研究会」を立ち上げ、春と秋に定期的に研究会を催し、研究打ち合わせを密に行うとともに、お互いの研究成果を報告し合った。またシャンソンをテーマにしたシンポジウム

(「20世紀のシャンソンを回顧して」2012年11月10日(土)・11日(日)、於信州大学人文学部)を企画し、ベル・エポック期から現代までのシャンソンの変遷を辿り、シャンソン史におけるいくつかのジャンルをテーマにした研究発表及び講演を行うと同時に、内外から集まった研究者や参加者たちとシャンソンをめぐる活発なディスカッションを行い、本研究テーマを深めることができた。

(3) 上記研究会に多くの新たな会員を募ってシャンソン研究の裾野を広げるとともに、研究誌『シャンソン・フランセーズ研究』を刊行し(年1回刊行、現在4号まで発行)、研究成果を発表した。

## 4. 研究成果

(1) フランス国立図書館やモンマルトル博物館などでのシャンソン関連の収蔵資料調査、文芸キャバレー跡地の実地調査、古書店などでの資料調査などを通じて発掘・収集した一次資料や、当時のレコードに録音された歌手たちの音源を復元したCDや、挿絵入り楽譜付歌詞などの貴重な文献・資料を入手し、それらの資料に基づいて19世紀中葉から20世紀初頭にかけてパリの文芸キャバレーやカフェ・コンセールにおいて活躍したシャンソン作家たちの作品を調査研究し、彼らが行った社会風刺的、政治的、文学的シャンソンの実相を明らかにした。

(2) 第二帝政、普仏戦争、パリ・コムンを経て第三共和制へと至る近代フランスにおける文芸シャンソンとその作者の活躍の場となったパリのカルチエ・ラタンやモンマルトルに次々に誕生したイドロパット、イルシュット、シャ・ノワール、ミルリトン、ラパン・アジュール、アーヌ・ルージュといった詩人サークルや文芸キャバレーの実態と、そうした場におけるシャンソン作者と文学者や芸術家たちとの交流や影響関係について明らかにすることができた。

(3) 当時人気を博したジャン・バティスト・クレマンやウジェーヌ・ポティエなどのシャンソン作家をはじめ、実際に文芸キャバレーにおいてシャンソン作家として活躍したギュスタヴ・ルロワ、アレクシス・ブヴィ

エ、ウジェーヌ・グランジェ、ピエール・デュポン、アンリ・ブリサック、エマニュエル・ドゥロルム、ガストン・クレミュー、ルイズ・ミッシェルなど中には今日では名前すら忘れ去られてしまっているようなシャンソン作家たちの作品を発掘し、その歌詞内容を知ることができた。

(4) 当時文芸キャバレーに足を運んだモリス・ロリナ、アンドレ・ジル、フランソワ・コペー、ジャン・リシュパン、モンズレ、ジュール・ジュイ、マリア・クリジンスカ、アルフォンス・アレ、エリック・サティ、ヴェルレーヌなどの高踏派や象徴派やデカダン派の詩人や音楽家たちとシャンソンとの関わりを明らかにすることができた。

(5) 当時文芸キャバレーで活躍したアリストイード・ブリュアン、ガストン・クテ、モリス・マク・ナブ、イヴェット・ギルヴェールといったシャンソン歌手たちの足跡を辿り、その実態を明らかにした。

(6) これまで日本においてはあまり知られていなかったテレザ、ポーリュス、ポラン、メイヨール、ドラネム、フラグソンといった19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したカフェ・コンセルのスター歌手たちの人気の秘密に迫り、レコードが普及する以前の彼ら独特の歌芸やパフォーマンスについて収集した資料等を基に明らかにした。

(7) 本研究を通して、日本における学術的シャンソン研究の基礎固めを行うことができた。文芸キャバレーや大衆的娯楽の花形であったカフェ・コンセルにおいて普及し花開いたシャンソン文化が、20世紀を通じてどのように受け継がれ、また変遷していくかを追求することが今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8件)

- ① 吉田正明、ベル・エポックとシャンソン—カフェ・コンセルのスターたち—、広島大学フランス文学研究、31号、1-16、2012、査読無
- ② 三木原浩、コラとフレエルとふさぎの虫、シャンソン・フランセーズ研究、4号、51-67、2012、査読無
- ③ 三木原浩、シャンソンの歌詞の変容と伝承—シャンソン *Auprès de ma blonde* をめぐって、説話・伝承学、20号、1-14、2012、査読無
- ④ 吉田正明、フランス詩と音楽—フランス・ルネサンス期の詩と音楽の交錯、シャンソン・フランセーズ研究、3号、36-54、2011、査読無

- ⑤ 三木原浩、ジョルジュ・ブラッサンスの雨傘をめぐって—天国の片隅—、シャンソン・フランセーズ研究、3号、75-88、2011、査読無
- ⑥ 吉田正明、アラゴンとシャンソン—原詩とその変容—、シャンソン・フランセーズ研究、2号、1-20、2010、査読無
- ⑦ 三木原浩、ピアフが、港の娼婦を歌うとき—シャンソン『ミロール』と『見知らぬ人』、シャンソン・フランセーズ研究、2号、41-62、2010、査読無
- ⑧ 三木原浩、サン—ジャンの眩惑—シャンソン『サン—ジャンのあたしの恋人』—、クインテット、30号、102-140、2010、査読無

[学会発表] (計 6件)

- ① 吉田正明、ベル・エポックとシャンソン、第20回シャンソン研究会特別企画シンポジウム「20世紀のシャンソンを回顧して」、2012.11.10、松本 (於信州大学人文学部)
- ② 吉田正明、ベル・エポックとシャンソン、第31回広島大学フランス文学研究会、2012.8.4、東広島 (於広島大学文学部)
- ③ 吉田正明、フランス・ルネサンス期の詩と音楽—ロンサルを中心にして—、第18回シャンソン研究会、2011.10.28、神戸 (於神戸大学大学院国際文化学研究科)
- ④ 吉田正明、パリの文芸キャバレーの跡地を訪ねて—バルバラの「レクリューズ」とジャン・フェラ追悼—、第17回シャンソン研究会、2011.5.27、松本 (於信州大学人文学部)
- ⑤ 三木原浩、「天国の片隅」二題、—ティノ・ロッシとジョルジュ・ブラッサンス—、第17回シャンソン研究会、2011.5.27、松本 (於信州大学人文学部)
- ⑥ 吉田正明、アラゴンとシャンソン、第15回シャンソン研究会、2010.5.28、松本 (於信州大学人文学部)

[図書] (計 1件)

- ① 三木原浩、彩流社、シャンソンの風景、2012、254頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉田 正明 (YOSHIDA MASAOKI)

信州大学・人文学部・教授

研究者番号：20191611

(2) 研究分担者

三木原 浩 (MIKIHARA HIROSHI)

神戸大学・国際文化学研究科・名誉教授

研究者番号：70116177